

《第482回（2021年5月13日）子どもの本の読書会記録》 参加者：8人 文書参加：2人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

## 『ウィズ・ユー』 濱野 京子／作 くもん出版

高校受験を控えた、中学三年生の悠斗。兄と母親の三人暮らしをしている悠斗ですが、親からの愛情や期待は成績優秀な兄にのみ注がれ、家庭の中で自分の居場所を感じられずにいました。ある日悠人は、日課にしている夜のランニング中、公園のブランコに一人静かに佇む少女・朱音と出会います。

朱音は、悠斗とは別の公立校に通う中学二年生。病気で療養中の母親を自宅で看病しています。父親の単身赴任のため、食事の支度や小学生の妹の世話などの家事を一手に引き受けている彼女は、いわゆる「ヤングケアラー」。大好きな母親のために、自分が家のことをするしかないと考えています。しかし、家事と学業を一人で両立させるには到底時間は足りず、通学や友人付き合いにも影響が出ていました。

お互いに寂しさを抱える二人は、徐々に惹かれ合っていきます。悠斗は朱音の力になりたいと願うようになり、朱音も、悠人に出会ったことにより、初めて自分の胸の内を明かすことができるように。夜の公園を舞台とした二人の恋模様や、いかに……。

次に、読書会に参加された方の感想を紹介します。

- すべてにおいて優秀な兄と比べられる悠斗。父親は家出をして別居中だが、母親はその件についても冷静に対応をしている。人は、出会いが大事だと思う。朱音も、悠斗と出会ったことによって、いい方に向かっていくことができた。
- 突っ込みどころは多い。朱音が私立校から公立校に転校した際、家庭の問題は学校が把握してるだろうし、母親が通院しているなら、病院のソーシャルワーカーがいるだろうし、朱音が夜の9時きっかりに、公園で息抜きするのも難しいのでは…。
- もどかしくなるような不器用な恋物語。ヤングケアラーの問題を知る上での入り口として、良い本だと思う。こういった実態を知らない子どもも、この本を読んで、頭の片隅に知識として置いておいてもらいたい。

●まとまっていて、良い本。朱音の母が、朱音に「こんな自分、生きてる意味ない」と泣いた場面、朱音は、自身の怒りをやり過ぎて、母の発言を受け入れることができたのだろうか。現実のこどもは、できないと思う。

●社会の中で見えにくいテーマを、悠斗と朱音の恋にからめて上手くまとめている。「家族の介護や看護は、家族が行う」という感覚が暗黙の上にあるが、教育や福祉の垣根を超えて、こどもが一人で抱え込まないような社会を作してほしい。

●日本は、「家のことは家で」という感覚が強く、自分自身も、理解のない気持ちを持ってしまったこともある。家の問題を、友達に知られたくないという気持ちは分かるので、支援の手を差し伸べることの難しさを感じる。

●「ヤングケアラー」という言葉が出てきて、実態が明らかになってきたように思う。ヤングケアラーの子は、こどもにとって重すぎる荷物を背負っている。こどもの時間を十分に保障することが大人の責任。

●専業主婦でも大変なのに、朱音には学校も勉強もある。どう頑張っても時間が足りるわけない。そんな重いテーマでも、悠斗とのラブストーリーがあるから、こどもには読みやすいと思う。中学生の瑞々しい恋を読むのは楽しかった。

●家族の介護はプライベートな問題なので、気軽に友人に相談できなかった気持ちはよく分かる。悠斗がヤングケアラーについて知り、福祉関係の仕事をしている悠斗の母親と朱音が繋がっていく物語の流れに、ほっとした。

次回 6月10日（木）10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『ダーウィンの「種の起源」 はじめての進化論』

サビーナ・ラデヴァ／作・絵 福岡 伸一／訳 岩波書店